

I D E G A W A

松本市出川遺跡

緊急発掘調査概報



1990・3



序

出川遺跡は県下最古の古墳である弘法山古墳の西方1.5kmに位置し、弥生土器の出土するところとしてよく知られていました。折しもこの遺跡に区画整理事業が及ぶこととなり、事業に先駆けて発掘調査をすることになりました。調査は、松本市教育委員会職員を中心に地区の皆様の御協力により、平成元年七月末から九月末にかけて行なわれ、その結果は、中世の集落跡、墓、井戸等が発見されるなど大変意義深いものでした。

本調査は酷暑の時期でもあり、そのうえ発掘現場に大量の地下水が湧き出すなど調査員、作業員の方々には非常に御苦労いただきました。また松本市農業協同組合をはじめ関係諸機関、地元の皆様にも甚大な御理解と御協力を賜りましたことに対し、心から感謝申し上げます。

本書が地元の歴史解明と文化財保護に対する皆様の御理解に少しでもお役に立てば幸いです。

平成2年3月

松本市教育委員会教育長 松村好雄

例　　言

1. 本書は平成元年7月24日から9月28日にかけて行なった松本市大字出川町字町浦1841番地、他に所在する出川遺跡の発掘調査の概報である。
2. 本調査は出川地区土地区画整理事業に伴う緊急調査であり、松本市が松本市出川地区区画整理組合より委託を受け、松本市教育委員会が調査を行なった。
3. 出川遺跡は、昭和60年1月に今回の調査地の約500m南側で市営住宅建設に伴う調査（未報告）が行なわれており、今回の調査は第2次調査にあたる。
4. 本書の執筆はI-1：事務局、II-4-1)：竹内靖長、4)：西沢寿晃、吉沢克彦、III-1：太田守夫、2：沢柳秀利、他を新谷和孝が行なった。II-4-5)は森義直のデータをもとに新谷が行なった。
5. 本書の作成にあたっては、出土遺物より遺存状態の良好なものを抽出し、図化等を行なった。従って本書に図示した遺物は全体の一部のみである。
6. 本書の作成にあたっての諸作業は下記の者が行なった。
竹内靖長、久保田嶺、町田庄司、五十嵐周子、久根下三枝子、塙原晴美、新谷和孝
7. 整理及び執筆にあたっては、野村一寿（遺構、遺物）、関沢聰（石器）、太田守夫（地質）、西沢寿晃（人骨）、森義直（植物遺存体）の諸氏より御教示、御協力を得た。
8. 出土遺物、図類、関係書類等は松本市教育委員会が保管している

目 次

序・例言

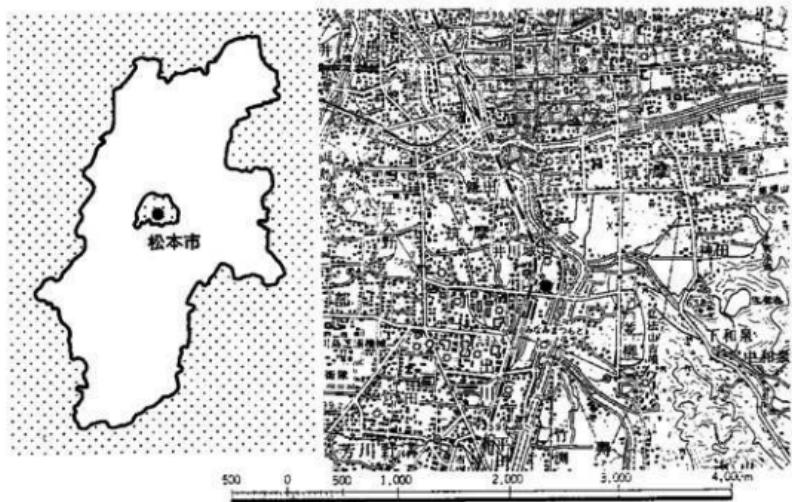
目次・図目次

I 調査の経緯	3
II 調査の結果	4
・検出された遺構	6
・出土遺物	18
・出川遺跡出土の人骨について	20
・植物遺存体	21
III 付編	
1. 遺跡の地形と地質	22
2. 出川遺跡の歴史的背景について	25
IV 調査のまとめ	26
図版	

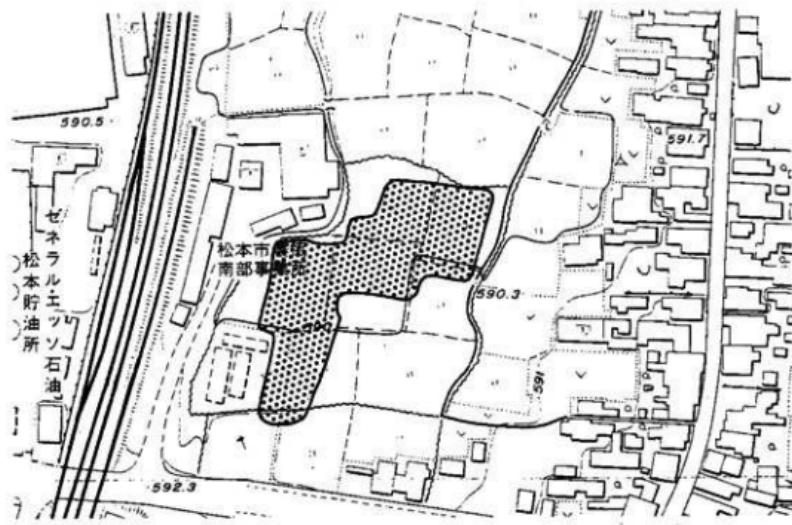
図 目 次

表紙 墓1出土羽子板の絵

第1図 遺跡の位置 (1 : 50,000)	2
第2図 調査位置 (1 : 2,500)	2
第3図 調査区全体図 (1 : 300)	4・5
第4図 第1号住居址 (1 : 60)	6
第5図 第2号住居址 (1 : 60)	7
第6図 墓 (1 : 10)	8
第7図 火葬墓 (1 : 30)	9
第8図 P _{se} (遺物出土状態 1 : 10、平面図 1 : 20)	10
第9図 P _{se} (遺物出土状態 1 : 10、平面図 1 : 20)	11
第10図 出土銭貨 (1 : 1)	14
第11図 土器・陶磁器 その1 (1 : 4)	15
第12図 土器・陶磁器 その2 (1 : 4、1 : 3)	16
第13図 石器 (1 : 3、2 : 3、1 : 6)	17
第14図 土層模式図	23
裏表紙 墓1出土羽子板 (1 : 2)	



第1図 遺跡の位置 ($\times 50000$)



第2図 調査位置 ($\times 2500$)

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

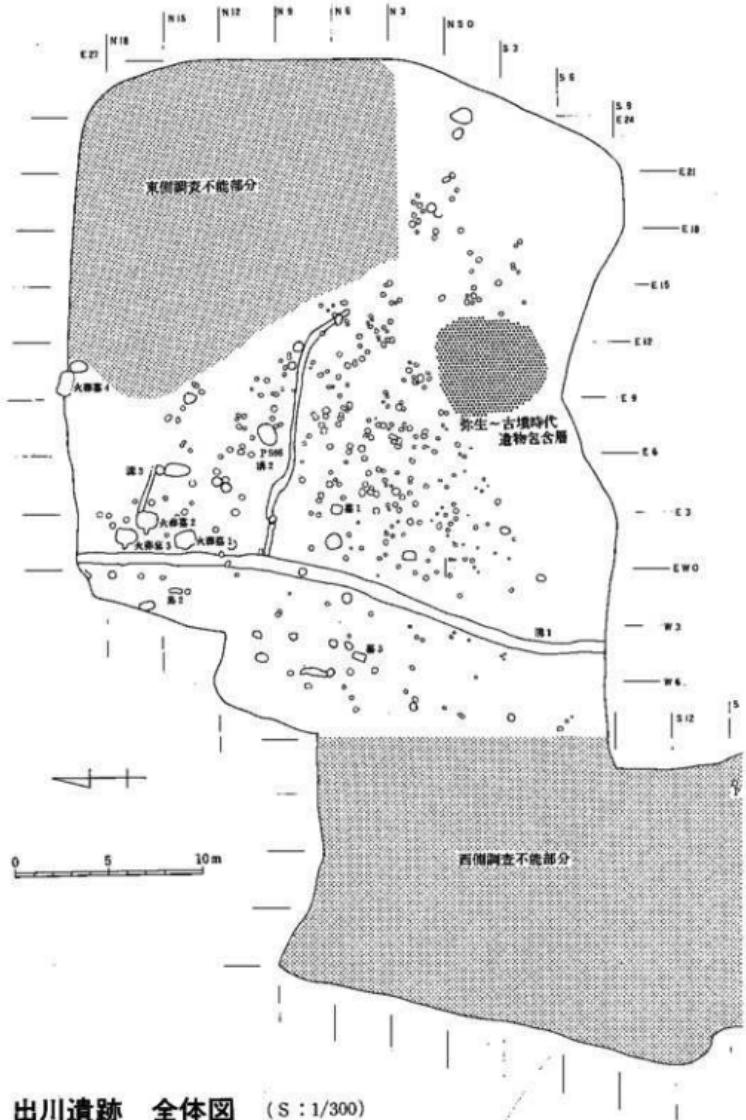
近年、市街化区域となった出川地区は近世の北国西街道にあたる県道沿に集落を形成している。当県道は、塙尻・寿方面から松本市街に入る主要道路となっており、當時渋滞を引き起こしている。このため、集落の西側を区画整理して、バイパスの建設及び宅地化を図ることになった。昭和63年度に土地区画整理組合が設立されるとともに担当課より埋蔵文化財の照会があった。同地区は出川遺跡の範囲にあたるので、文化財保護のため事前協議を行ない、記録保存を目的として発掘調査を実施することとし、発掘調査は松本市出川土地区画整理組合の委託を受けて松本市教育委員会が行なうことになった。

出川遺跡は東に出川を挟んで弘法山古墳を臨み、同古墳出土の土器と類似した土器が出土していることもあって同古墳に関係する集落址があるのではないかと推定されており、以前から注目されてきた遺跡であった。当遺跡の発掘調査は昭和60年にJR線路の西側で実施されたのみで実態は不明のままであった。

今回の発掘調査は、平成元年7月10日に松本市出川土地区画整理組合と松本市が埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、同年7月24日から調査を実施したものである。

2 調査体制

調査団長	中島俊彦（松本市教育委員会教育長 平成元年7月31日退任）
	松村好雄（松本市教育委員会教育長 平成元年8月1日着任）
調査担当者	熊谷康治（社会教育課係長）新谷和孝（社会教育課埋文担当）
現場担当者	新谷和孝 久保田剛（社会教育課埋文担当）
調査員	太田守夫 西沢寿児 森義直
協力者	青木雅志 伊丹早苗 乾靖子 今村嘉子 海野洋子 小原稔 児玉春紀 田多井亘 田多井うめ子 田口吉重 多田邦彦 遠山明 中村安雄 丸山恵子 百瀬二三子 百瀬義友 矢島利保 米山楨興
事務局	浅輪幸市（社会教育課長）田口勝（文化係長）熊谷康治（課係長）直井雅尚（主事） 降旗英明（主事）山岸清治（主事）赤羽美保
整理作業	特に調査団の編成は行なわず、新谷和孝、竹内靖長（社会教育課埋文担当）を中心となり行なった。



出川遺跡 全体図 (S : 1/300)

II 調査の結果

1. 調査の経過

平成元年

7月24、25日 調査区内の休耕田の水抜き作業
及び南側部分の重機による試掘を行なう。

7月26～28日 調査区中央部に排水路を掘る。
ポンプによる排水を開始。重機による表土除去
を行なう。湧水が激しく、作業は難行する。

7月29、30日 電動ポンプ設置。各所に仮排水
路を掘り、水抜きを行なう。

8月2日 機材搬入 以後8月6日まで、排水
路掘りを行なう。

8月7日 遺構検出作業開始。

8月9日 調査区中央部を拡張。重機による表
土除去を行なう。

8月21日 遺構検出作業終了。この間、数回に
渡り雨のため調査区の一部が水没し、復旧作
業を行なう。午後より測量用の座標設定及び
遺構の掘り下げを開始する。

8月28日 台風21号による雨のため、調査区の
大半が水没。排水、復旧作業を行なう。

8月30日 出川土地区画整理組合による出土人
骨の供養。西沢寿晃氏現地指導。墓の調査を
開始する。

9月6日 ピットの掘り下げを、ほぼ終了する。
柱根の残るものが多くみられる。

9月7日、11日 西沢寿晃氏現地指導。出土人
骨の取り上げを行なう。

9月12日 ピット内の柱根の掘り上げを開始す
る。湧水のため作業は難行する。

9月18日 台風22号と、それに続く大雨のため
調査区のはば全体が水没。9月21日夜まで排
水・復旧作業を行なう。

9月22日 太田守夫氏現地指導。地質調査。

9月23日 溝の未掘部を掘り下げる。全体写真
を撮影し調査を終了する。ポンプを撤収した
ため、湧水で調査区は水没する。

9月28日 機材を搬出し、全ての調査を終了、
ポンプの排水能力と稼動時間より算出した、
調査期間中の総排水（湧水+降水）量は、約
50,000ℓに達した。

2. 調査の結果

今回の調査で検出された遺構は、次の通りで
ある。

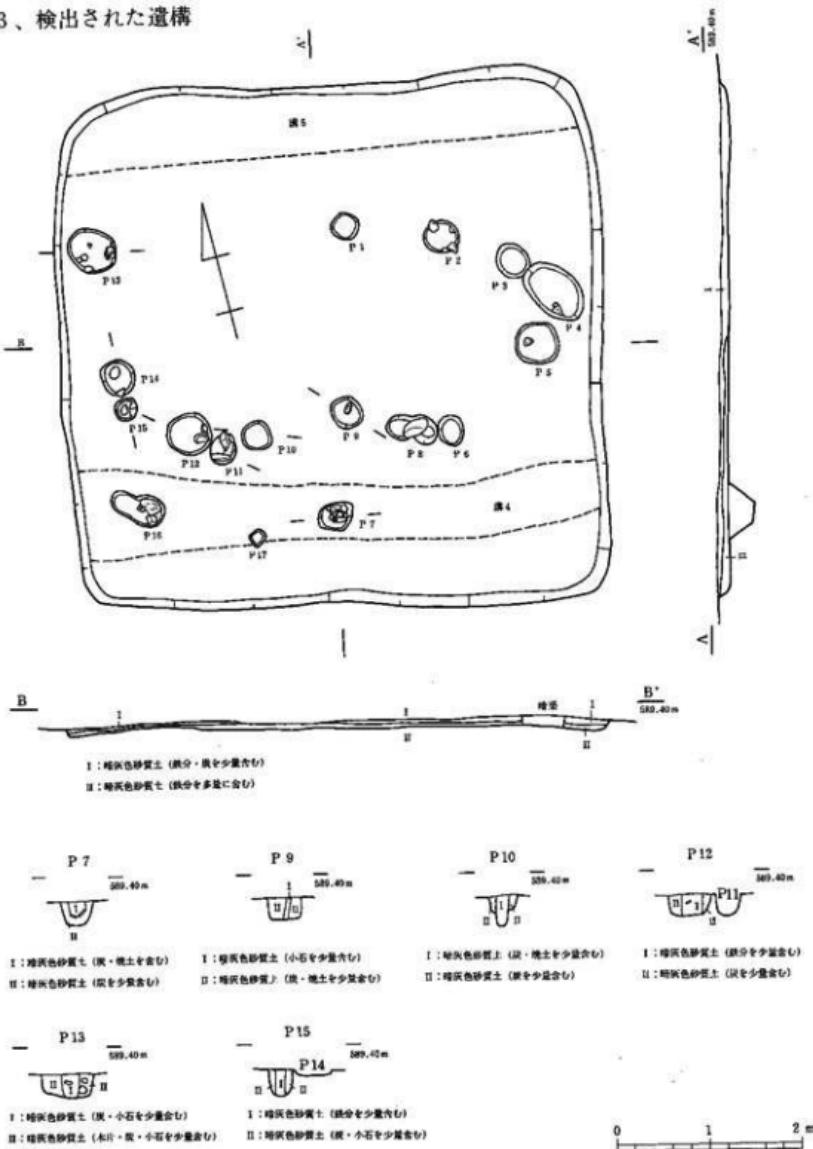
住居址 2 ピット622 溝 3

墓7（火葬墓4、その他3）

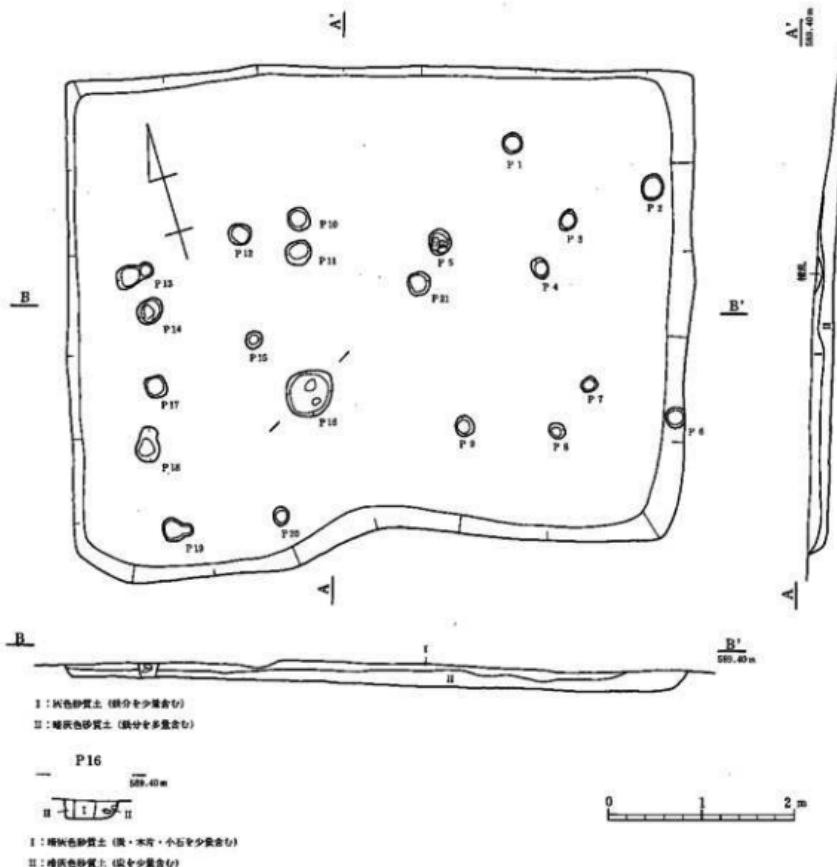
ピットの中には建物址、井戸等を含んでいる。



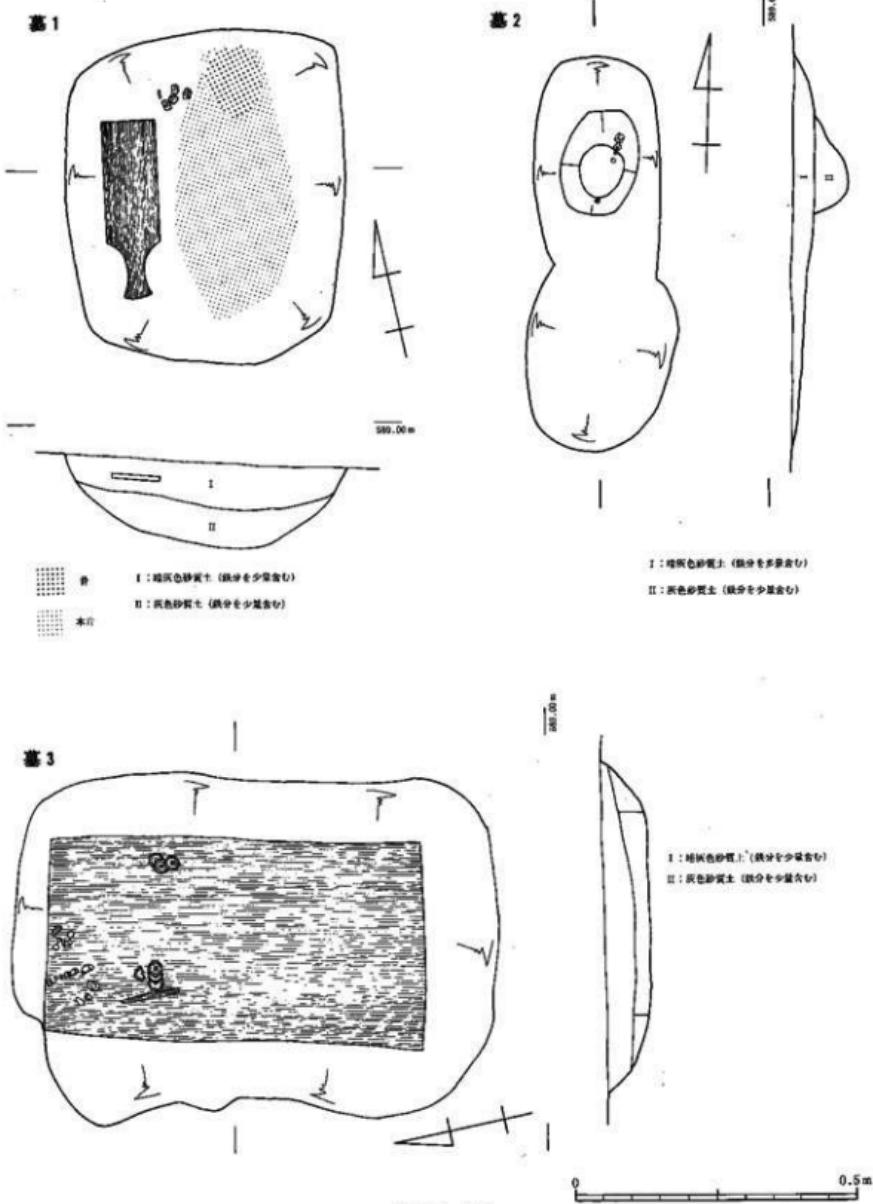
3、検出された遺構



第4図 第1号住居址



第5図 第2号住居址

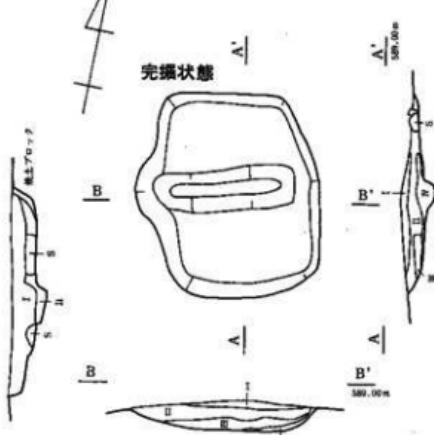
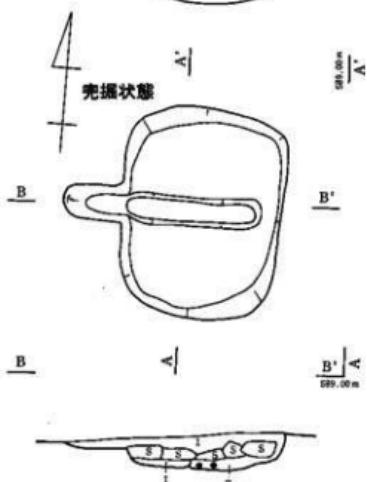


第8図 基



I : 黄褐色砂質土 (灰分・灰を少量含む)
II : 褐色砂質土 (灰・骨分を多量含む)

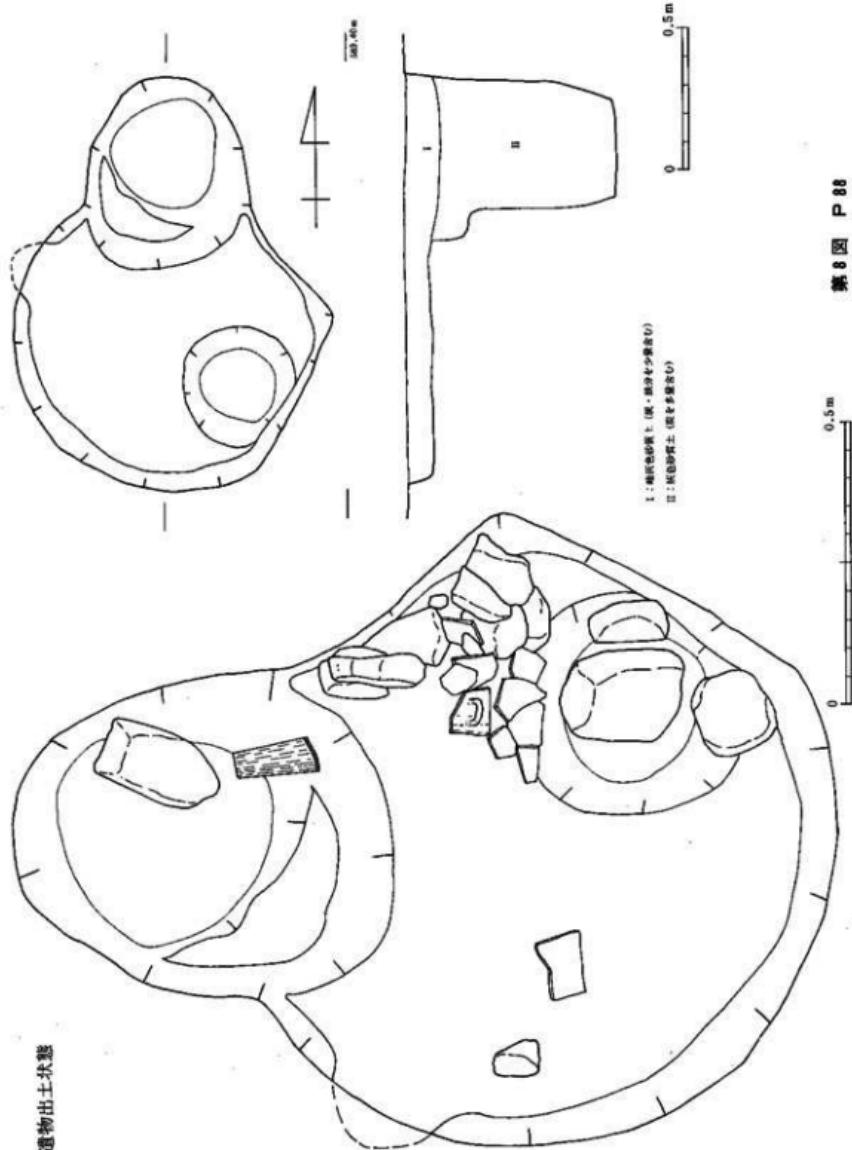
火葬墓 3 上層



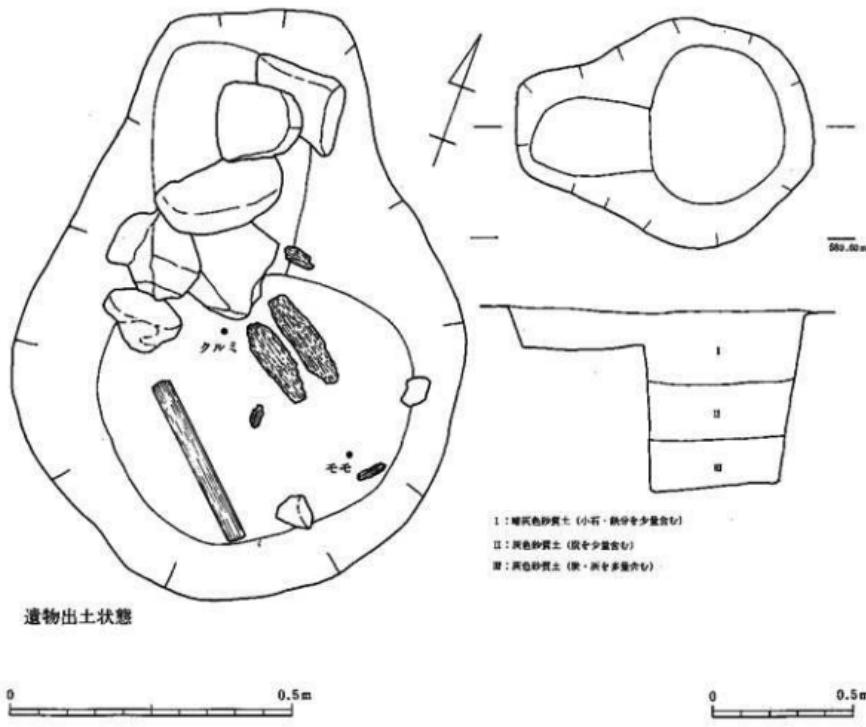
I : 黄褐色砂質土 (灰分を少量含む)
II : 褐色砂質土 (灰・骨分を多量含む)
III : 骨、骨片
IV : 褐色砂質土 (灰分を多量含む)

0 0.5m

第7図 火葬墓



遺物出土状態



第8図 P 86

3. 検出された遺構

第1号住居址（第4図） 調査区の南西部に位置する。溝4、5を切り、P111、113及び、現代の暗渠に切られている。北壁は、溝5を埋めている砂層中に立ち上がりがあるため、不明瞭である。南北5.5m、東西5.8mの隅丸方形である。火災により廃絶されたと推定され、覆土中には多量の炭化材を含む。床は地山を固めており起伏が多い。壁は最も高い部分でも15cm程度にすぎない。カマドは検出されていない。ピットは17個検出された。全てのピットより炭化物、焼土が検出されており、P9、10、12、13、15には、柱痕が明瞭に観察された。P7、16は溝4の底よりも深く掘り込まれている。柱穴の配置は中央部に東西に2列に並んでいたと推定される。P2、3、11からはモモの種が、P4からはクルミの実が出土している。遺物の量は少なく、内耳鍬がほとんどを占める。内耳鍬はP7より2個体、P16より1個体が出土している。P11からは、大型の砾石（第13図8）が、溝のある面を下に向かって出土している。他には覆土中より元豊通宝が1枚出土し

ている。本址の時期は、出土遺物より、16世紀前半～中頃と考えられる。

第2号住居址（第5図） 調査区の南西部に位置する。第1号住居址に隣接し溝4、5を切り、P160及び、現代の暗渠に切られる。南北5.4m、東西6.7mの方形で南西隅に入口と思われる張り出しをもつ。主軸方向はN-15°-Eで、第1号住居址と、ほぼ同じ方向を向いている。覆土は自然の堆積で安定しており、炭化物等の混入は認められない。壁は地形に沿って削平されており、北側の遺存状態は不良である。カマドは検出されていない。ピットは20個検出された。柱痕が明瞭なものはP13、16のみであるが、多くのピットから炭化物及び木片が検出されている。P2からは、鉢皿と桃の実が出土している。柱穴の配置は雑然としており、不明である。遺物の量は非常に少なく、図示したものが、ほとんどである。本址の時期は、出土遺物より16世紀前半と考えられる。

墓1（第6図） 調査区の中央部に位置する。溝1及び建物址と推定されるピット群と隣接しているが、他構造との切り合いはない。南北60cm、東西50cmの方形で、深さは約15cmである。掘り方の底は丸く、すり鉢状になっている。中央部には腐蝕した木の皮の破片が散在し、その上部の北側の隅寄りに骨と歯が固まって出土している。骨は腐蝕が進行しており現形をとどめておらず、部位等は不明であるが、出土位置より頭骨の可能性が高い。歯は内部は腐蝕により空洞化し、外側の硬い部分のみ遺存している（P20参照）。この遺体の脇の上部には羽子板（実測図は表紙に掲載）が、絵の描かれた面を下にして副葬されていた。羽子板はヒノキの一枚板を加工しており、遺存状態は良好である。（樹種は森義直氏の御教示による。）絵は墨で描かれており一部不鮮明な部分があるが残りは良い。手前に2個の俵、奥の左側に花、右側に人物を描いているものと推定される。羽子板の遺存状態が非常に良好であることより、この墓は、遺体を直接、あるいは布等に包んだ状態で、木の皮を敷いた上に埋葬しており、棺等の施設は存在しなかったと推定される。被葬者は歯より、6～7才の幼児で、羽子板より女の子と推定される。本址の時期を直接決定できるものはないが、中世末から近世初頭のものと推定される。

墓2（第6図） 調査区の北部に位置する。南北70cm、東西30cmの不整円形で、主軸はほぼ南北に一致している。上側の深くなっている部分の上部より幼児の上顎歯が10本固まって出土している。歯の遺存状態は墓1と同様、表面の固い部分を残すのみである。配置は本来の配置（並び方）のままである。本址の本来の構造は、どのようなものであったか不明であるが、歯の出土状態などから北側の深くなっている部分に遺体の頭部があった可能性が高い。本址の時期を決定できる遺物はない。

墓3（第6図） 調査区の中央部に位置する。南北87cm、東西60cmの不整隅丸方形で、主軸方向はN-20°-Eである。掘り方の底は平坦で、そこに接するように棺が作られている。棺はヒノキと思われる材を極めて薄く剥ぎ、穴の内側に貼るように敷いている。棺の大きさは南北62cm、東西35cmの長方形で深さは約5cmである。上部の一部が削平により欠損しているが、遺存状態は良好である。棺内部からは、北西隅より歯が15点、北西部より銭が4点、棒状の木片が1点、北東部より銭が3点出土している。いずれも棺の底とはほぼ同じ高さからの出土である。銭は元豊通宝2枚（初

鎧1078年、1枚は模鋳錢)、皇宋通宝1枚(初鑄1039年)、聖宗□□1枚(聖宗通宝もしくは聖宗元宝、いずれも初鑄1101年)、永樂通宝1枚(初鑄1408年)で、他の2枚は腐蝕、破損のため不明である。齒の遺存状態は墓1、2と同様、表面の圓い部分を残すのみである。被葬者は齒より幼児と推定される。本址の時期は、出土遺物より中世末のものと推定される。

火葬墓1 (第7図) 調査区の北部に位置する。南北110cm、東西80cmの隅丸方形で、西側に約30cmの張り出しをもち、そこから連続して底の中央部が溝状に凹んでいる。底及び壁は全体に良く焼けている。底面の上より、炭と骨が混ざって出土した他、中央部より錢が2枚重なって出土した。聖宗通宝(初鑄1039年)と□元通宝で、いずれも被熱による劣化が著しく、遺存状態は不良である。本址の時期は、出土遺物と形態より、中世のものと推定される。

火葬墓2 (第7図) 調査区の北部に位置する。北西で溝3を切る。南北116cm、東西88cmの隅丸方形で、西側に約30cmの張り出しをもち、そこから連続して底の中央部が溝状に凹んでいる。底及び壁は全体に良く焼けている。覆土の上部には中央の凹みを挟むように石が2列に並べられていた。底より多量の炭と骨が混ざって出土した他、錢が2枚出土している。1枚は元祐通宝(初鑄1086年)で、他の1枚は錢種不明である。いずれも遺存状態は不良である。本址の時期は、出土遺物と形態より、中世のものと推定される。

火葬墓3 (第7図) 調査区の北部に位置する。南北110cm、東西80cmの隅丸方形で中央部が東西にわずかに張り出し、底部中央が溝状に凹む。底及び壁は全体によく焼けている。南端部の上部に石が列状に並べられているが、石には被熱は認められない。底より炭と骨が混ざって出土しており、出土状態より遺体を曲げた状態で火葬したものと推定される。他の遺物は出土していない。本址の時期は、形態より中世のものと推定される。なお火葬墓1~3は近接しており、主軸方向には、ややバラつきがあるものの、形態等は共通点が多くみられる。これらのことより、この三つの火葬墓は、ほぼ同時期のものと推定される。(火葬墓4は湧水のため全体を調査できなかった。)

P88 (第8図) 調査区の南部、第1号住居址の南側に位置する。南北145cm、東西117cmの柄鏡形で、北側が深い穴になり、南側は直径約1mのテラス状になっており、南東部に直径約40cmのビットをもち、西壁の一部は袋状に掘り込まれている。北側の深い部分からは人頭大の礫と長さ約40cmの板が壁に立てかけた状態で出土したほか、底よりモモの実が数個出土した。テラス部からは内耳鍋2個体が、つぶれた状態で出土している。テラス部の穴からは大型の砥石が出土している。本址の性格は井戸と推定される。また時期は内耳鍋より15世紀末~16世紀前半と推定される。

P96 (第9図) 調査区の南部、第1号住居址の南側に位置する。南北90cm、東西105cmの柄鏡形で南西部にテラス状の張り出しをもつ。テラス部には廃絶時に投入されたと推定される大型の礫が6個入っている。覆土は上層に多量の炭、焼土が混入している。北東の深い部分の底には、編み物と思われる木片が敷かれ、炭化材、灰、粘土が厚さ1cm程度の層状に何重にも堆積していた。この層の中には炭化種子、クルミ、モモの実が混在し、層の上には、長さ32cmの板が斜めに置かれて

いた。さらにその約20cm上からは直径6cm程の炭化材が2本出土している。本址の性格は井戸と推定される。また直接時期を決定できる遺物はないが、中世のものと推定される。

P604 調査区の中央部に位置する。排水路にかかって検出されたため調査できなかった。検出面より約1m下に石が敷かれていた。中世の井戸と推定される。

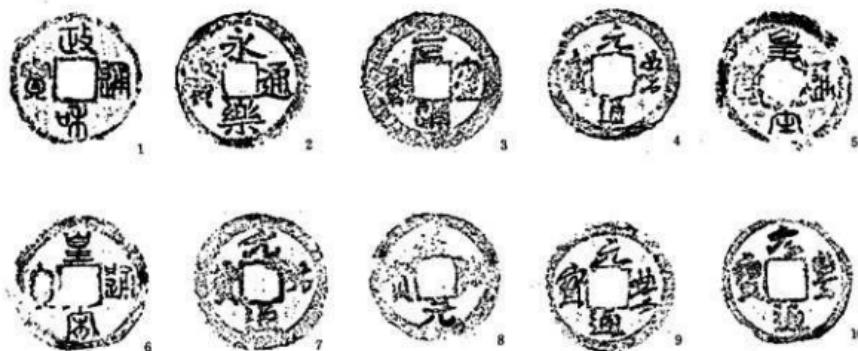
溝1 調査区の中央～北部に位置する。わずかに曲がりながら南北に走り、P532、535、552、603、604に切られる。幅は平均80cm、深さは20～50cmで、底は南に向けて傾斜している。断面形は逆台形である。出土遺物は少ないが、火葬墓3に隣接する付近の底より楕と思われる漆製品が1点出土している。赤と黒の漆で文様が描かれており、表面の漆の部分のみ遺存している。本址の時期は出土遺物より、中世のものと推定される。

溝2 調査区の北部に位置する。幅20cm程度で深さは安定していない。西端は溝1に接合している。本址からは遺物の出土はないが時期は溝1と同時期のものと推定される。

溝3 調査区の北部に位置する。火葬墓2に切られる。ほとんどが削平されており、時期は不明である。

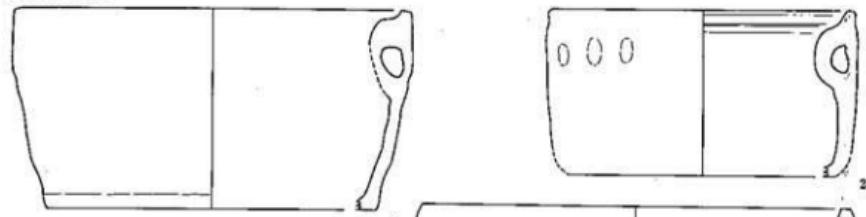
溝4、5 調査区の南部に位置する。第1、2号住居址に上部を切られる。溝4は幅約70cm、深さ約50cm、溝5は幅約110cm、深さ約70cmである。溝5は砂により埋まっている。溝4は溝1と非常に良く似ており、同一の溝の可能性が高い。時期はいずれも出土遺物より中世のものと推定される。

建物址 調査区各部より検出されたピット群の中には柱根の遺存するものや、柱底が明瞭に観察できるものが多い。これらは中世の建物址の一部と推定されるが、プランを明確に推定できるものはない。調査区南側の一群には、ピットに多量の焼土の入ったものが多く、火災により廃絶されたものと推定される。

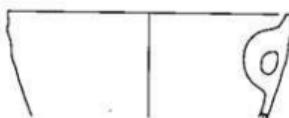


第10図 出土銭貨 (実物大)

第1号住居址



1住-3



1住P16

第2号住居址

2住-1

1住P12

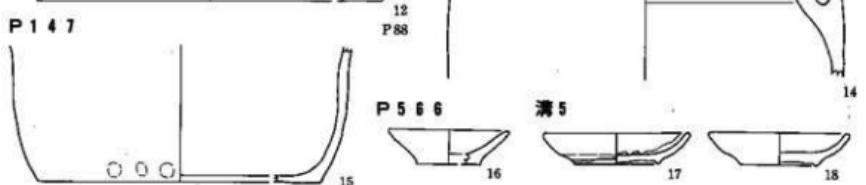
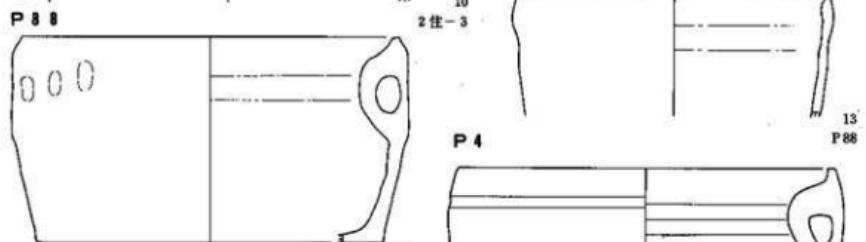
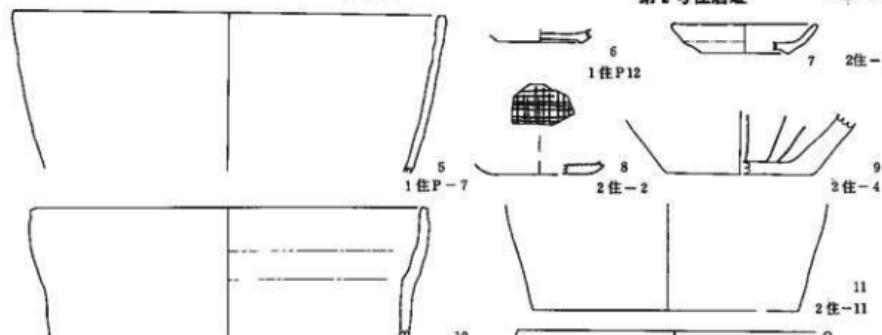
5
1住P7

6
1住P12

7
2住-1

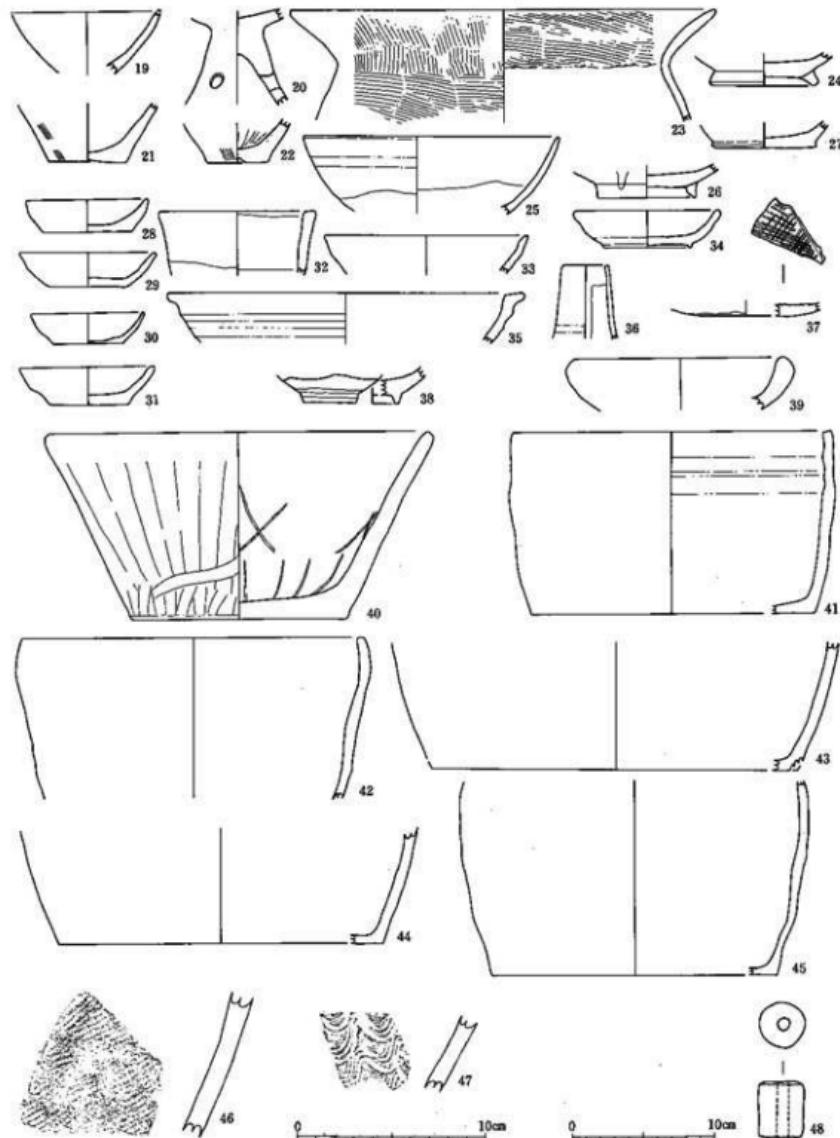
8
2住-2

9
2住-4

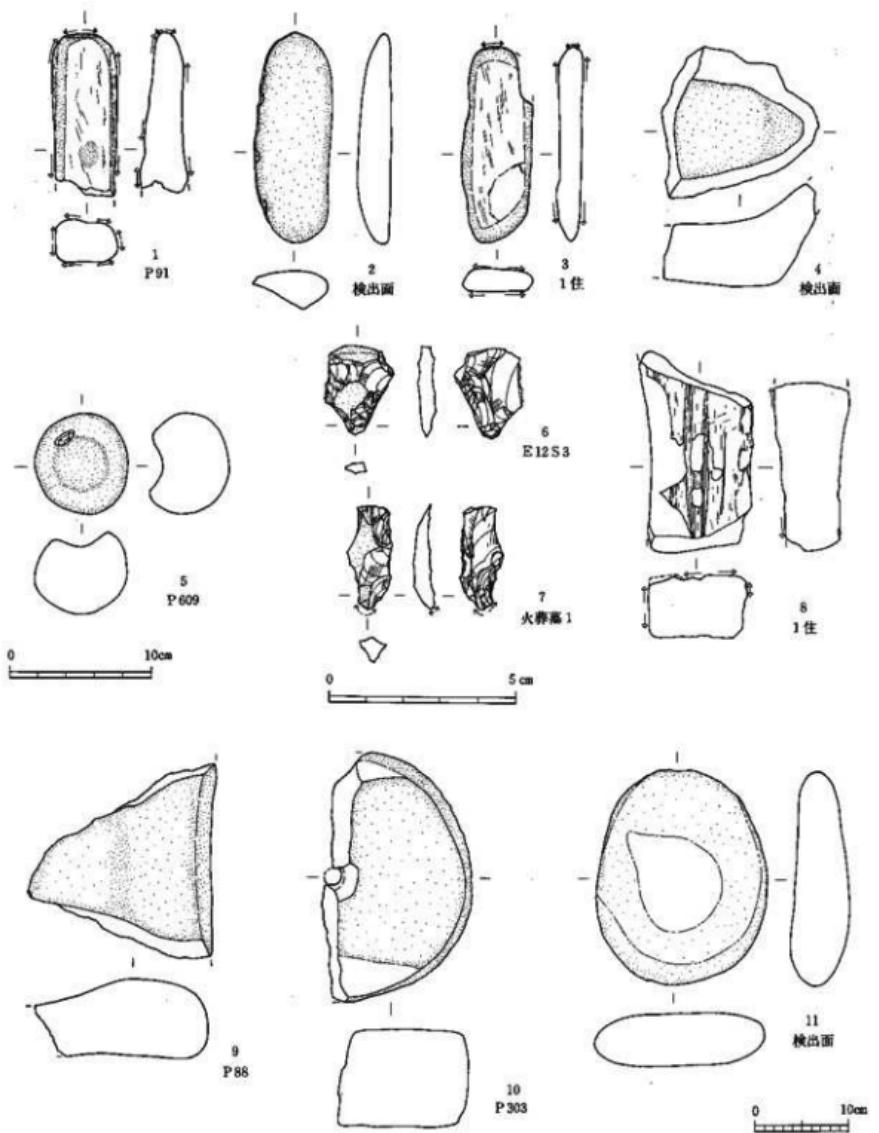


第11図 土器、陶磁器 その1

0 10cm



第12図 土器、陶磁器 その2 (46, 47: 1%, 他は3%)



第13図 石器 (1~5: 1号、6・7: 5号、8~11: 6号)

4 出土遺物

1) 土器・陶磁器 今回の調査で出土した土器・陶磁器の総出土量は少なく、コンテナ数にして1箱に満たない。その種類は古式土師器、中世の土師質土器、内耳鍋、瀬戸美濃系陶器、近世の肥前系磁器が出土している。これらは住居址・ピット・溝址等の遺構に伴って出土するよりも、検出面から出土した量の方が多い。以下、出土地点ごとに記述する。

(1) 住居址・ピット・溝址出土の遺物

(ア) 第1号住居址 (第11図1~6) 内耳鍋5点(1~5)と瀬戸美濃系陶器の天目茶碗1点(6)を図示している。内耳鍋はその法量より大・小の二種類に分類できる。2・3は、口径20.0~20.1cmを測る小形のもので、器高は19.2cmと浅い。2は、口縁内面に二条の工具ナデ痕がみられ、体部外面には指頭圧痕を残す。4・5は、口径30.2~30.4cmを測る大形のもので、4は口縁部がほぼ直に立ちあがり、口縁内面に一条の工具ナデ痕が見られる。5は口縁部がやや直線的に開き、口縁部内面に二条の弱い工具ナデ痕がみられる。6は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗で、全面に鉄釉が施され化粧がけされている。高台は内削ぎ高台で大窯製品と考えられ、16世紀前半~中頃に帰属する。共伴する内耳鍋も同時期に比定されよう。

(イ) 第2号住居址 (第11図7~11) 7と8は瀬戸美濃系施釉陶器である。7は、口径10.2cm、器高2.1cmの丸皿で、緑灰色の灰釉が全面に施されており、割れ口には漆の付着が観察され、補修した痕跡が窺える。大窯製品とみられ、16世紀前半に比定される。8は、卸皿である。底径は6.2cmを測り、外面に乳白色の灰釉が施されている。小片のため時期決定は難しい。9は擂鉢である。土師質で、内・外面にミガキ調整痕が見られ、内面には擂目がみられる。10・11は内耳鍋である。10は口径28.0cmを測り、口縁は「く」の字状に外反し内面に二条の工具ナデ痕がみられる。

(ウ) ピット・溝 P₄、P_{5a}、P_{1a}からは内耳鍋が出土している。P_{5a}からは、口径26.6cmと22.0cmの二法量がみられる。P_{5a}からは、土師質土器皿が出土している。ロクロ成形で、器高に比して器壁は薄い。溝5からは瀬戸美濃系陶器の綠釉皿と丸皿の2点が出土している。17の綠釉皿は口縁部のみに灰釉が施され、高台は削り出し高台である。18は全面に灰釉が施され、底部は削り出し高台で、輪トチンの痕跡がみられる。17・18ともに大窯製品である。

(2) 検出面出土遺物

(ア) 古墳時代前期の土器 (第12図19~23) 19~23の5点を図示している。いずれも破片で出土量は少ない。19は高环か鉢の破片と考えられ、内外面は赤色塗彩され、内面にミガキが施されている。20は高环の脚部で、内面を除き赤色塗彩され、透し孔は小片のため1箇所観察されるのみである。21~23は甕である。23は「く」の字状に外開する頸部と口縁部で、口縁内面~外面にハケメが施されている。

(イ)平安時代の土器・陶器 (第12図24~27・46・47) 内黒土師器 (黒色土器) 梱1点 (24)、と灰釉陶器碗2点 (25・26)、須恵器裏片2点 (46・47) を提示している。25は横け掛けで施釉され、26は回転糸切り痕をナデて消している。

(ウ)中世の土器・陶磁器 (第12図27~37・39~45)

土師質土器 盆は5点図示している (27~31)。すべてロクロ調整で、口唇部をヨコナデして僅かに面をもたせている。40は擂鉢である。内面には放射状とX字状の擂目が見られ、外面には縱位のケズリが施されている。

瀬戸美濃系陶器 32は筒形の香炉で、口縁部のみに灰釉が施されており、古瀬戸系後期様式に比定される。34の丸皿は、内外面に灰釉が施され底部に輪トチンの痕跡が残る。16世紀前半代のものと考えられる。35は折縁深皿である。口縁部でやや内曲して強く外反し、内外面に灰釉が施されている。36は、水瓶の口縁部で、口縁内面~外面に鉄釉が施される。

2) 石器 (第13図) 今回の調査で出土した石器の量は少なく、コンテナ1箱に過ぎない。時期別に見ると、今回検出された遺構に伴う中世のものがほとんどで、近隣遺跡からの流入品と思われる。繩文・弥生時代のものが僅かに存在する。今回はこのうち11点を図示した。1は、安山岩製の四・敲・磨石で全面が使用され、下端は折損している。表面は全体に磨滅している。2は、砂岩製のスクレイバーで、一側縁が使用されている。3・8・9は砥石である。8は深い溝状の使用痕が明瞭に残る。石材は3が緑色凝灰岩、8が砂岩、9が安山岩である。4は安山岩製の火手鉢の破片、5は安山岩製の凹石である。6・7は黒曜石製の石錐である。いずれも混入品と思われ、表面の磨滅が著しい。10は安山岩製の石臼で約1/2が残存する。11は上面中央部に炭化物の付着がみられ、建物の礎石に使われていたものと推定される。石材は安山岩である。

これらの石器の時期は1・6・7の3点が繩文・弥生時代、2は不明、他の7点は中世のものと推定される。

3) 銭貨、鉄製品 (第10図) 銭貨15枚と鉄製品数点が出土している。このうち遺存状態の良好な銭貨10点の拓影を図示した。遺構に伴うものについては各項の中で触れているので省略した。8は□元□宝または□□元宝と読める。P₂₂からの出土である。9・10は元豐通宝 (初鑄1078年) でいずれも検出面からの出土である。銭貨以外ではP₂₆の覆土上層より鉄鍋の底部と思われる破片が出土しているが、図示していない。

4) 出川遺跡出土の人骨について

人骨が検出された墓址は火葬墓4基と土葬墓3基である。以下、これらの墓址からの人骨の出土状態と内容について略記する。

火葬墓：各墓址の形状・規模等はおおむね共通する傾向を示す。すなわち薄い覆土の直下で、ほぼ長方形の掘り込みがなされ、焼骨が存在する最下位まで約15~20cm程度の深さである。およそ全面に骨片の散布がみられるが、個所によってやや集中的である。骨片中にはかなり濃密に炭化物が混り合い、部分的に厚薄をなす焼土が周壁、底面に付着している。骨片は極めて細片化し、部位の確認できるものはわずかである。頭骨をはじめ、全身骨格の部分はすべて混在する状態であり、葬位などは不明である。各墓址とも骨片の量は、通常の火葬骨に比してやや凝集されるが、それぞれ全身部位に亘る1個体のものと見なすことができよう。

火葬墓1——焼骨はすべて細片状であるが、量的には通常の1個体分のものであろう。頭骨片はわずかであるが、膝蓋骨や指骨など骨質の堅緻な部位が残存する。長大な管状骨部分はやや大形片として残るが、著しい変化を伴う破碎片となっている。歯根が3本残存。手・足の基節骨などは火熱の影響による収縮の結果を勘考しても、かなり繊細な形態を示している。

火葬墓2——きわめて微小な骨片のみで、量もやや少ない。頭骨も細片状で見分け難いが、歯冠や歯根の破片が残存する。橈骨の骨体が極度に弯曲して残るが、かなりきやしゃな形態と見られる。

火葬墓3——括して骨片は多量である。頭骨の後頭骨外後頭隆起は顕著であり、側頭骨の鱗部やラムダ縫合を残す破片など、板上骨片を含め、總じて骨壁は厚く頑丈である。上顎骨の一部、歯根1本などが認められる。長大な管状骨の破片も多い。大腿骨々体の一部は約5.5cm残り、粗線は明瞭な発達を示す。脊椎骨、肩甲骨の小部分も残存する。

火葬墓4——頭骨の前頭稜の一部や、板上骨片が5・6片、歯根1本、肋骨片などと、管状骨の骨片が多いが、すべて細片である。上腕骨、大腿骨、頭骨などの骨体の骨壁は厚い。髄腔が炭化して黒色を呈する骨片がある。

土葬墓：出土人骨はすべて歯に限定される。硬組織である歯のエナメル質で形成される歯冠部のみが保存に耐え、他の部位の骨はすべて土中での腐蝕・溶解による消失の結果であろう。以下、出土内容について略記する。

墓1——羽子板が頭部の右側に添えられた状態で出土した。薄い覆土の直下で、羽子板と残存歯はほぼ同一レベルである。上・下顎の歯が概ね歯列を整えて残り、顎骨を含む頭骨や、他の骨格部位は全く残存しない。わずかに歯群の左下方に黄白色の骨片が認められたが、部位は不明である。これらの上表面に薄い木片がわずかに検出されている。歯は乳歯と永久歯の混合群で、一部の歯種は崩壊して破片となっている。

墓2——上顎の歯群のみが正常な歯列を保ち完存するが、植立する顎骨や、他の骨はまったく残

存しない。混合歯群である。棺様の木質片等の形跡も認められない。

墓3——薄板を使用したかなり保存の良い小型の木棺中に古錢と歯が残存する。骨はまったく認められない。歯は破碎された歯種を含め、上・下顎の殆どが残存する混合歯群である。

以上の土葬墓3基に遺存する歯の特徴について述べる。すなわち、3例ともに乳歯の脱落と永久歯の萌出という交換期に該当するものである。共通する現象として上・下顎の第2乳臼歯（E）は脱落していない。この歯種は歯根吸収開始が生後8年頃であり、脱落は10~12年とされている。同じく1号墓での第1乳臼歯（D）は歯根吸収開始8年、脱落9~11年である。また永久歯の場合、第1切歯（1）の萌出が7~8年、歯根完成9~10年、第2切歯（2）で萌出8~9年、歯根完成10~11年とされる。第1大臼歯（6）は萌出6~7年、歯根完成9~10年とされる。両歯群とともに歯根の吸収・完成の過程に、土中での腐蝕の程度も加わり一概にいえないが、総合的にみて、各例で多少の相違はあるが、10歳に近い年齢層が推定される。比較的、近接する位置に設けられた墓の被葬者が、それぞれ年齢の相似する小兒であることは、興味深い事例であるといえよう。

歯の鑑定には轟朝五博士の御教示をいただきました。深謝申し上げます。

5) 出川遺跡出土の自然遺物について

本遺跡は湧水地にあるため、建物の柱根などの遺存資料が多く、一部腐蝕により判別困難なものもあるが、遺存状態は全体に良好である。資料の大半は現在樹種鑑定中のため、判明したものについて考察したい（遺構の項で触れたものについては除外した）。
柱材 1住P₁₂針葉樹（樹種不明）同P₁₆アカマツ、P₂₈ナラまたはクリ。
種子 2住覆土カボチャ、溝5クルミ、P₂₂コメ（穀）、P₂₂モモ、P₂₆モモ・クルミ・アワ・ヒエ・オオムギ・豆2種（ササギ状のもの・ダイズ状のもの）・コメ（穀、大小バラツキあり）、P₁₄モモ、P₂₈モモ、P₃₂モモ、P₃₆モモ、P₄₂モモ。これらのうち、モモは野生種と改良種と思われる2種が存在する。
木片・その他 2住針葉樹（スギ？）・ヒノキ（底にあった編み物）・サワラ（炭）、火葬墓2ナラ（炭）

土葬墓出土歯 齒式

	⑤ ⑩ ⑥ ⑦ ⑧ 6 5 4 3 ⑨ 1	A B C ⑩ ⑪ 1 2 3 4 5 ⑥
墓1	⑥ 5 4 3 2 ① ⑨ D C B A	① 2 ③ 4 5 ⑥ A B C D ⑩

	⑤ ⑩ ⑥ ⑦ ⑧ 6 5 4 ③ ⑨ ①	A B C D ⑩ ① ② ③ 4 5 ⑥
墓2	6 5 4 3 2 1 E D C B A	1 2 3 4 5 6 A B C D E

	⑤ ⑩ ⑥ ⑦ ⑧ ⑥ 5 4 ③ 2 ①	A B C D ⑩ ① 2 3 4 5 ⑥
墓3	⑥ 5 4 ③ ② 1 ⑨ D C B A	① ② ③ 4 5 6 A B C D ⑩

A~E：乳歯
1~6：永久歯
○印：残存歯
(他の歯は破損または欠失)

III 付編

1 遺跡の地形と地質

1) 位置と地形

本調査地は南松本貨物駅構内の北約50m、JR篠ノ井線の東沿い約30mに位置している。周辺は都市化が進み、前記の南松本駅、篠ノ井線、松本市農協の施設、住宅団地、諸工場等が集まっている。埋立てが進み、標高を表わす等高線がたびたび変更されるなど、すでに自然地形の観察は難しくなってきている。

地形上は北流する田川の沖積地に属し、その特徴は、北西へ極めて緩やかに傾く低湿地と、豊富な湧水にある。この低湿地は松本市の市街地に広がる、複合扇状地の末端における湧水とデルタ（三角州）性堆積によるものと同様で、その南端に当たる。主に田川の影響を受け、遺跡の附近で沖積扇状地性の堆積物から、湿地の細粒堆積物に移っていて、その接点はおよそ遺跡の位置する標高 591m の等高線（現在の南松本駅北踏切〈地下道〉を通る市道に沿う線）に沿うものと見られる。埋立ての進む以前の地図によって見ても、この線を境として北側は湿田、南側は畑地となっていて、接点の状態がうかがえる。

低湿地の堆積物は附近の地下調査によると、上部は厚さ 3~5m のシルト層、下部は厚さ 10m の礫層からなっている。扇状地性堆積物は出川南遺跡（1987, 1989報告）と共に通する、田川系統の礫を含む礫層、礫混りの土、砂質土、粘質土である。

遺跡の豊富な湧水は想像以上で、たまたま発掘が秋霖期の雨季と重なったため、約 50cm の表土を除くだけで湧出が始まる状態であった。発掘時には排水ポンプが必要となり、終了後は満水の池となってしまっている。この湧水は明らかに扇状地の末端現象の伏流水であって、遺跡の東方 350m を流れ、天井川となっている田川の影響が最も大きく、牛伏川・奈良井川が加わるものと見られる。

水源である湧出口は、低湿地一帯に分布しているが、特に規模の大きいものは直径数m のわん状の地形をしている。穴田川や頭無川がこれらの水を集め低湿地を流れ下っている。湧水口の南源は、前述の標高 591m の線に沿っているが、時には遺物の南 250m（現在南松本貨物駅）に規模の大きい湧水源があったように、この線を越えているものである。

ところで寒候期の乾季になると、遺跡にたたえられた水は完全に干上がり、周辺の湿田の表面にも水を見なくなる。また湧水口、水路、川は干上がるか減水してしまって、夏季との違いが大きい。これは周囲の山地や複合扇状地からの伏流水が暖候期の雨季と寒候期の乾季とでは大きく違っているためである。雨季には遺跡附近の地下水位の高さは、ほとんど標高と同じくなるため自然水位となるが、乾季には 1m 以下に下がるためとみられる。発掘地はこのような地下水の季節的変化の激

しい環境が繰り返されてきたところと考えられる。

2) 遺跡の堆積層

挿図1は前述のような湧水の流れの中で観察出来た堆積層である。上部から下部まで湧水によって選別され運ばれた砂・泥と、ヨシなどの植生をもった浅い湿地の細粒堆積物である。各層の堆積の傾向をみると次のようになっている。

(1)層は現在まで水田として利用されていた層で、全面に斑鐵が広がり黄褐色が強く、乾田の耕土と様相が違っている。

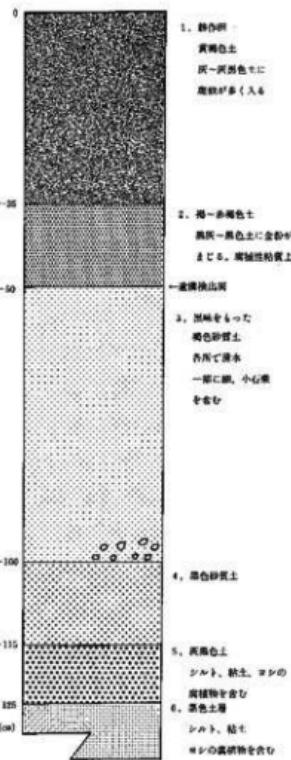
(2)層は粘質土で溶脱層がなく、鉄分の沈着が目立つ一方、青味を帯びた腐植質もみられる。

(3)層は遺構の検出層で、乾くと固くなる褐色砂質土の縮まった層である。層内の一部に細・小砾を含み、湧水の流れに洗われて出てくる。また(2)、(3)層には現在の水田の暗きよ排水施設である、木組みや埋め石が見られる。

(4)層は土相は(3)層に、色相は(5)層に近い薄層であるがはっきりした腐植は持っていない。

(5)層と(6)層はいずれもヨシの腐植物を含み、(5)層はシルト質、(6)層は粘土質の傾向が強い。(4)(5)(6)層とも人手によって破壊されていない。

これらの堆積層の中でわずかな傾きを思わせるのは(4)(5)層で、層厚にも変化が見られる。不透水層は(2)(6)層と考えられ、特に(2)層は(3)層を通して湧水の出口を遮る形で堆積しているため、(3)層は地下水脈になっていると考えられる。したがって(1)(2)層をはぐと、(3)層の各所に湧出口が現われることになる。暗きよ排水の施設がこの(2)(3)層に設けられているのも、この水脈と関係があると思われる。



第14図 土層模式図

3) 地形の形成と遺跡

以上の堆積層や堆積状況から、本調査地の地形上の位置は、扇状地末端に近い低湿地内と考えられる。微地形的にはヨシの腐植物から見ても浅い湿地で、扇状地堆積物を受けない場所と考えられ、下部層ほどこの傾向が大きかったとみられる。堆積した細粒堆積物の泥土・砂は、湧水の流れによって運ばれたものと、低湿地内部の泥土・砂の移動によるものと考えられる。層に傾斜があれば湧水による流れに、傾斜がなければ内部の移動によるものと考えられるが、わずかな範囲の観察であるため、層の厚薄、平均性、連続性を確かめることができなかった。

さて遺跡の立地との関係を見ると、遺跡の検出層(3)では中世の住居址、墓址、柱穴が発見され、生活が営まれていたと考えられる。一方現在の(3)層は湧水層であり滞水層であって、生活の場となりにくい。また季節的変化による乾季と滯水季のような短期間現象では説明がつかない。そこで中世は減水期に当たり低湿地が縮小し、湿地の最上面であった(3)層が地表に現われ、固化した期間が相当量あったと考えられる。この場合(1)(2)層はそれ以後の低湿地の拡大に伴う堆積に見られる。(3)層が思いのほか乾燥すると固く、また(2)層の下部に腐植の堆積が見られることからも、この堆積の状況が考えられる。

陥化の原因には次のことが考えられる。一つは(3)層が陥化した中世のころが、気象上乾燥期に当たり降水量が少なかった。二つは現在の田川を始め市街地に集まる河川に見られるように、天井川となった河床沿いに砂礫の堆積物を広げ、市街地に展開する低湿地へ突入、その面積を狭めている状況である。現在の河川は堤防により押さえられているが、かつては乱流した河川であるから、堆積は鳥趾状であった。これにより低湿地の面積の縮小、減水域の形成があったと考えられる。(3)層はあるいはこの当時の鳥趾状の高まりの一部であって、充分生活域になりえたとも考えられる。低湿地周辺の発掘の少ない現在、充分な検討が出来るためにも、同じ状況の遺跡の発掘が期待される。

2 出川遺跡の歴史的背景について

今回の出川遺跡の調査では、15~16世紀の集落の一部が検出されている。ここでは当時の出川周辺の歴史的背景について述べてみたい。

室町時代の応仁元年（1467）に京都で勃発した応仁の乱の余波は日本全国に及んだ。14世紀末の大塔合戦以来混乱状態にあった当信濃国は、それにより更にその度合を増し、守護小笠原氏が三家（伊那松尾、同錦岡、府中深志）に分裂して相争い、加えて他の中小土豪も割換し、複雑な様相を呈していた。中信地方には、深志小笠原氏が守護として林城（松本市里山辺）にいたが、一国支配には及ばず、安曇・筑摩両郡を抑えるのがやっとという状態であった。

戦国時代の天文年間（1532~55）になると、信濃国は内外ともに一層不穏になってくる。松本近辺でみると、天文6年（1537）には諫訪氏が塙尻辺りまで侵入し、赤木・吉田へ放火を行うなどしたという記録もある^(註1)。その後諫訪氏は隣国甲斐の武田氏に亡はされ、諫訪地方は武田氏の支配地となった。それにより塙尻辺が小笠原氏と武田氏の勢力境界となった。しかし天文14年（1545）には、武田軍の一部が峠を越えて、林城近辺にまで放火をしたという記録もある^(註2)。そして3年後の天文17年に、塙尻峠の戦いで小笠原氏は敗れ、武田氏は峠を越えて村井に小屋城を築き、前線とした。林城などが落城し小笠原氏が没落していくのは、更に2年後の天文19年である。その間、武田氏は小笠原氏に対して積極的な攻撃はしていないと思われるが、周辺小土豪に対する懷柔工作や、神社などに対する工作を行っていたようである^(註3)。この間にも武田氏による小笠原氏領内に対する放火などが行われていたことは想像できる。

本遺跡で検出された第1号住居址は複土中に多量の炭化材を含むことより、焼失したものと考えられる。また南側の建物址も柱穴内に多量の焼土がみられ、住居址と同様であると思われる。出川は林城（館）から西へ約3km、井川館から南東へ約1kmと、小笠原氏の本拠地からも近いことから、この集落も放火に遭った可能性がないだろうか。

註1 「諫訪神使御頃日記」天文6年2月2日条（信濃史料刊行会 1976 「新編信濃史料叢書」第14巻）

2 「高白齊記」天文14年6月14日条（新人物往来社 1967 「武田史料集」）

3 「地原神社所蔵文書」、「仙石文書」（信濃史料刊行会 1970 「信濃史料」第11巻）

IV 調査のまとめ

今回調査が行なわれた周辺は、市内でも有数の湧水地であり、遺構の存在する可能性は低いものと予想された。調査が行なわれた時期は、一年を通じて最も地下の水位が高い時期であり、調査は困難を極めたが、注目すべき成果をあげることができた。以下項目ごとに触れてみたい。

住居址は2軒検出されたが、いずれも遺物の出土量は少ない。しかしいずれも柱穴と思われるビットの中より、モモ、クルミの実が出土したことが注目される。これについては確証はないが、住居址の建築に伴なう地鎮の儀式に使用された可能性が指摘できる。

墓は土葬、火葬を合わせて7基が検出された。土葬墓（墓1～3）は、ほぼ同時期のものと推定されるが、その様相は、それぞれ大きく異なっている。墓1から出土した羽子板は県内では類例のない貴重な資料である。また、墓3とともに、該期の墓からの遺体検出例としても貴重なものといえよう。土葬墓には幼児が、火葬墓には成人が埋葬されているという区別も興味深い。火葬墓の分布から推定すると、調査地の北側に墓域が拡がっていた可能性が高い。

ビットは多數検出されたが、建物址として復元することはできなかった。建物以外では、前述のP88、96の井戸と推定される2つのビットが注目される。両者ともに覆土中より板や炭化材、モモ、クルミの実等が出土しており、確証はないが、井戸の廃棄に関連する儀式に使用されたものである可能性が指摘できる。この遺構については稿を改め、報告を行なう予定である。

集落全体の遺構の配置をみてみると、溝1、5に区画された北西部の未調査部に何らかの集落の中心的な遺構が存在し、溝で区画された外側、つまり今回の調査部分に住居、建物が分布していたと推定される。この未調査部分については、西及び北側が頭無川に接しているため、重機による表土除去の際、建物の柱穴と思われるビットが確認されたものの、すぐに湧水により水没し、調査することができなかつたことが惜しまれる。建物址は具体的なプランは想定できなかつたが、部分的に列を確認できた部分でみると、溝に沿って建てられていたものと推定され、集落の中で溝が重要な意味をもっていたことが窺われる。この集落の性格については規模等より農村と推定され、北側に拡がる低湿地に水田があり、それに面した微高地に集落があったものと考えられる。

近年松本平では、大規模な圃場整備や道路建設に伴ない、中世の集落の調査例が増加し、その様相が次第に明らかになりつつある。今回調査した出川遺跡も、そうした中のひとつであるが、その特異な立地により、過去の調査例にない知見を得ることができたことは、大きな成果といえよう。また市内中心部の同様の低地部分についても、今後の調査に期待するとともに、調査方法等の検討すべき課題も多い。

末筆であるが、今回の暑い日の過酷な湧水の中での調査と、ごく短かい期間の中での報告書作成に御協力いただいた、すべての方々に心よりお礼を申し上げ、結びとしたい。



第1号住居址 完掘状態

南側より 手前の石列は現代の暗渠。



第2号住居址 完掘状態

南側より 床は湧水で荒れている。



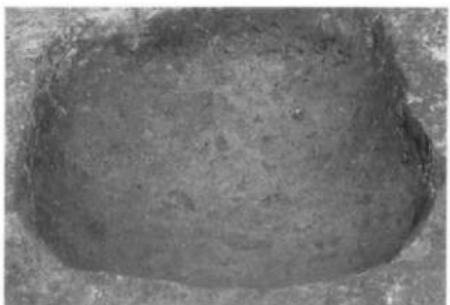
墓1 遺物出土状態

右下隅に歯が固まっている。



墓1 遺物出土状態

遺体の脇に添えるように羽子板が入れられている。



墓1 完掘状態



墓2 牙出土状態

中央の白い部分が歯



墓3 遺物出土状態



火葬墓3 碑出土状態

南の端に石が並べられている。



火葬墓1 遺物出土状態

多量の骨と炭が混ざって出土した。



火葬墓1 完掘状態



火葬墓2 完掘状態



柱根が遺存するピット



P86 遺物出土状態

板、炭化材などが出土している。



P86 完掘状態

柄のような張り出し部に段をもつ。



P88 遺物出土状態

テラス部より内耳鍋がつぶれて出土している。



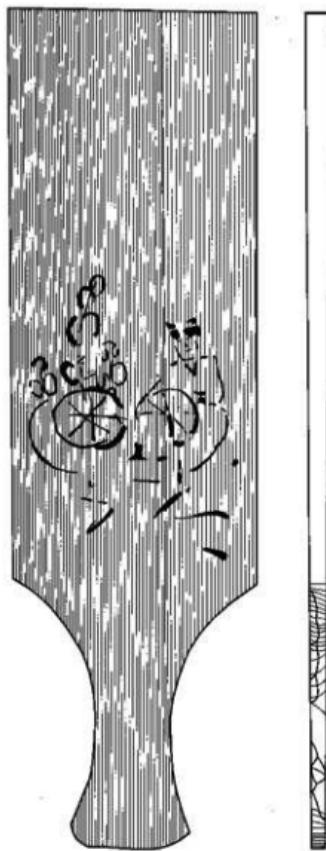
調査区北側のピット群 左端は清1

多くの建物址が重複しているものと思われる。



調査区南側のピット群

右端は第1号住居址。奥部中央右寄りの大きなものが
P88、建物址、井戸の覆屋などがあったと推定される。
各部に掘られている溝は排水路である。



0 5 cm

墓1出土 羽子板

松本市文化財調査報告 No.87
松本市出川遺跡

平成2年3月20日 印刷

平成2年3月20日 発行

編集 松本市教育委員会

〒390 長野県松本市丸の内3-7

Tel 0263(34)3000

発行 松本市教育委員会

印刷 川越印刷株式会社